

学位論文の要約

人間・環境学研究科共生文明学専攻 博士課程

6060300019

土谷 輪

本論はヨーロッパ政治経済の「周辺の周辺」と位置付けられてきたスペイン・エストレマドゥーラにおける人びとの生計手段、すなわち「暮らし」の過去と現在の状況を明らかにし、文化人類学の先行研究で都市的な文脈から論じられてきた不安定性の中における働き方やインフォーマル経済のあり方が「周辺の周辺」という非都市的な環境においても行われ、かつカンポ（campo、「労働可能な大地」）という広大な土地において行われることを論じるものである。

第1章では、経済の不安定性（precarity）とヨーロッパ人類学における文化人類学の先行研究を整理し本論の視座を示す。経済に関する不安定性研究は経済危機とその後の新自由主義的な政治経済の変化に対して人びとが補助金の利用や賃労を行うことでどのように状況に対応しているかが論じられる。しかしそこで論じられるのは、都市的な枠組みにおける働き方、不安定性への対応の方法、そして人びとのアイデンティティであった。

これに対して本論ではスペイン・エストレマドゥーラ南部のエル・シエロ（仮称）というカンポに囲まれた地域を対象に、人びとが経済の不安定性の下でどのようにカンポを利用してきたのかに注目する。現代では主に牧畜などが行われるカンポは、一方では現代史の中では人びとが働き、住まい、家族や隣人との紐帯が心象風景に残る場であり、他方では独裁体制期においては地主層による搾取的な農業労働が行われる場であった。そのような歴史をオーラルヒストリーから明らかにした上で、カンポで働くということが現代史の中でどのように行われ、現代において認識されているのかを考える。

その際に注目するのがヨーロッパ人類学における中心と周辺の議論である。ヨーロッパの中心と周辺という概念は、文化のみならず政治経済的な重要度から中心と周辺を示すものである。ヨーロッパの周辺とされる地域ではこれまでEU加盟による人びとのアイデンティティの変化が論じられてきたが、単に周辺から中心への移行を示すのではなく、スペインにおいて行われた「ヨーロッパへの回帰」に着目することでエストレマドゥーラの立場がどのように形成されたかが明らかになる。すなわち、スペイン帝国の没落と内戦、独裁からのEUへの復帰という「ヨーロッパへの回帰」を達成しゆく過程を踏まえると、そこには「スペインの奇跡」という未曾有の経済成長と、エストレマドゥーラがそれに取り残されるという不均衡な成長があり、エストレマドゥーラは経済的に後進的な、ヨーロッパの「周辺の周辺」として位置付けられていった。このように歴史の中で、エストレマドゥーラは不毛の地として表象されてきたのである。

こうした現代史の変遷の中でエストレマドゥーラの人びとがどのように働き、いかにカ

ンポを利用してきたかを明らかにすることで、現代の経済の不安定性のもとで人びとがどのように仕事を探し、カンポでの仕事に困難を抱えているのかを論じる。つまり産業が盛衰を繰り返す中、人びとは産業に従事したり、衰退後は短期雇用を転々したりする傍らで、カンポで働くということがどのように経済活動が行われていたのか、「暮らし」が営まれていたのかが明らかになる。このようにカンポに囲まれた場所であるということはインフォーマル経済についての議論でも前提とされる都市という文脈とは異なる環境であり、現代のエストレマドゥーラの人びとがどのように不安定性に対処し、フォーマルに／インフォーマルにカンポを利用しているのかを非都市的な状況から論じる。

また、カンポという領域は人びとが歴史の中で働いてきたことによってその状態が維持され、これを人びとは「カンポの純潔」という。不毛の地として表象されてきたエストレマドゥーラには人間によって介入されることで維持されるカンポは荒廃地との関連からその性質を理解できるが、近年では太陽光発電施設の開発、インフレーションや気候変動によって旧来的な働き方や「カンポの純潔」に変化が訪れている。

本論はこれらの状況を2019年から2023年にかけて行ってきた約22ヶ月のフィールドワークに基づき明らかにしていく。その構成は下記の通りである。

第2章ではスペイン内戦以降の経済史を概観し、独裁体制やアウトアルキー政策、「スペインの奇跡」という経済成長、そして「ヨーロッパへの回帰」とヨーロッパ経済の「周辺」の形成過程といった変動を整理する。これによってエストレマドゥーラがどのような歴史の上に「周辺の周辺」として位置付けられていったか、次章以降で検討するオーラルヒストリーがどのような前提に基づいているのかを明らかにする。

第3章では調査地エル・シエロの地理的・社会的概要を統計情報や書誌情報から述べ、基本的な情報を共有すると同時にカンポの慣習的な土地の認識などを紹介する。

第4章は古老たちの証言をもとに、「空腹の時代」と呼ばれたスペイン内戦後の時代のカンポが生活と労働の一体の場であり、鉱山業と並ぶ生計の中心であった時代を描く。特に「スペインの奇跡」以前の社会においてカンポという場が人びとによってどのように用いられ、またどのような心象風景が残る場所であるのか、人びとがどのように働いていたのかをオーラルヒストリーから明らかにする。これにより第5章や第6章で論じる産業の変遷やカンポでの仕事は何を想起させるものであるのかをみていく。

第5章では「スペインの奇跡」以降のエル・シエロの経済の盛衰をたどり、産業や商工業活動において人びとがどのようにして生計を立てているのかを明らかにする。特に重要なのは1970年代まで操業していた鉱山と、その後成長し2012年に経済危機の余波を受けて倒産したエル・シエロ最大の石材加工場GRACIELOの栄枯盛衰の過程である。これらの産業が成長しては衰退し、残された人びとは移民を決断したり、あるいはエル・シエロの周囲に広大に広がるカンポを用いた牧畜などを始めたりした。ここでは経済危機の後に社会を覆い始めた経済の不安定性の下で、どのように仕事を探し、あるいはカンポを用いて「暮らし」を維持しているのか、そしてそこにどのような流儀や困難があるのかを明らか

にする。

第6章ではカンボでの仕事の詳細を検討する。現代では牧畜や養蜂などの経済活動が行われるが、それらの仕事がどのように行われているのか、どのような種類の仕事があるのかを詳らかにしつつ、経済の不安定性とどのように対峙しインフレーションや気候変動といった新たな不安定性とどのように向き合っているのか、カンボが人びとの暮らしを支えながらも困難を抱える両義的なものであることを明らかにする。

第7章ではアスパラガス採集と販売というインフォーマル経済を通じて、都市外の非賃労働的活動の重要性を検討する。野生のアスパラガス採集はエル・シエロ近辺のカンボで広く行われ、買取人と採集人のネットワークによって現金に換金することができる、インフォーマルかつマイナー・サブシステムの様相を呈する活動である。このアスパラガス採集が失業保険などの社会保障給付の補填のために行われ、かつ暗黙の了解として行われていることを先行研究との対比から明らかにしていくことで、アスパラガスの「商業網」の広がりとし業としての重要性を指摘し、カンボが広大に広がっていることによって人びとがどのように経済の不安定性に対峙しているかを論じる。

第8章では冬の屠畜行事マタンサを事例に、「ヨーロッパへの回帰」後も地域的实践が根強く残ることを示し、カンボとプエブロの境界の変化を考察する。マタンサは冬にブタを屠殺、解体、加工することでソーセージなどの肉製品をつくる伝統的な行事であるが、この現場ではトラサビリダー（トレーサビリティ）や屠殺銃の使用など、EU指令に基づいた法律が実行される。スペインが「ヨーロッパへの回帰」を果たした結果としてこれらの制度が存在する一方で、エル・シエロに十分「根が張った」行事であるマタンサにおいてトラサビリダーは重要性をもたず、屠殺銃は動物倫理より解体の効率を目的に用いられる。特に、「ヨーロッパへの回帰」以前は村の中で行われてきたマタンサが現代ではカンボで行われるようになったことはカンボの用い方が変化したことを示すと同時に、カンボでしか創出されない価値があることを示している。

第9章では太陽光発電開発によるカンボの再利用と価値転換を取り上げ、人びとが開発を通じて土地との関係を再構築する過程を描く。近年のエル・シエロ周辺で行われている太陽光発電施設の開発は先行研究において論じられるように、都市での消費電力の供給のために地方が搾取的に用いられているというよりも、電力会社と地主との間の交渉に基づいて行われている。賛成と反対の意見はそれぞれ存在するが、反対意見として「カンボは純潔であるべきである」という言説に依拠しているものがある。つまりカンボはエル・シエロの人びとが働き続けることによって維持されるものであり、本論で検討してきた旧来的な用法が失われてしまう。これは「カンボの純潔」が失われていくのみならず、カンボで働くということの意味の変容を意味している。施設の建設に際して雇用される人びとがその仕事に対し十分な給与が与えられ、カンボを舞台に有期雇用に従事する一方でオーラルヒストリーの中にあったカンボでの働き方とは異なる方法で働くことを意味するようになってきたのである。

以上の議論を踏まえて第10章を考察と結論として、カンボの意味が歴史の中で大きく変化しつつも、人びとの生計と結びつき続けていることを論じ展望を述べる。カンボがオーラルヒストリーの中で苛酷な生活の場であると同時に人びとの紐帯を示したように、現代においてはそこでフォーマル／インフォーマルに働くことにより経済の不安定性の下で人びとが「暮らす」ための糧を得る場であり、かつ気候変動やインフレーションに直面する、両義的な場である。このように非都市的な環境において経済の不安定性に直面するということは、産業や商業活動が下火になった際に最低限の「暮らし」を維持するために働く場としてカンボが存在する一方で、困難を内包しているということである。